

黙示録2章8-17節 「異教の圧迫の中で」

1A 迫害を受ける教会 8-11

1B よみがえりの主 8

2B 苦しみを知る方 9

3B 死に至るまでの忠誠 10

4B 第二の死からの守り 11

2A 妥協する教会 12-17

1B 鋭い両刃の剣 12

2B アンティパスの殉教 13

3B パラムの教え 14-15

4B 戦われる主 16

5B 隠れたマナと白い石 17

本文

黙示録 2 章を開いてください、午前礼拝ではエペソの教会に対する、イエスのことばを聞きました。御霊が諸教会に告げることを聞きなさい、と言われていました。私たちは、過去のことではなく、たった今、御霊がわたしたちの教会に告げておられることを聞かないといけません。

1A 迫害を受ける教会 8-11

1B よみがえりの主 8

⁸ また、スミルナにある教会の御使いに書き送れ。『初めてあり終わりである方、死んでよみがえられた方が、こう言われる——。

エペソの次は、スミルナの町にある教会の御使いに語られていることばです。エペソの北 55 キロ程にある、同じく地中海に面する湾岸都市です。当時は、ローマの中で「アジアの美」とか「命と力の町」とか言われました。その町の美しさは、ローマ中に知られていたようです。今でもエーゲ海を眺める、美しい観光都市です。

スミルナの歴史は、「滅ぼされ、生き返す」というのが特徴です。そこはリュディア王国に紀元前 627 年に滅ぼされましたが、ギリシアのアレクサンドロス大王がここに来て、再建することに決めました。それで、「一度は死んでいたけれども、よみがえった」という誇りを持っています。そこでイエスは、ここにある教会の聖徒たちに、「わたしは死んで、また生きたのだ。」と言われたのです。

そして、スミルナは、ギリシアのセレウコス朝との戦いでローマと連合しました。その辺りからローマに対する忠誠を誓っています。ローマの女神の座というものを紀元前に造り、紀元後、皇帝テ

イベリウスのために神殿を建てました。しかし、ペルガモンが初めにローマからの特権を得て、スミルナは二番目になりました。強烈な皇帝礼拝が行われました。そこでキリスト者は偶像礼拝の圧迫の中で生きようになります。これが、このイエスの言葉の背景です。

皇帝礼拝は、ローマ帝国が非常に大きいので、皇帝を神格化させることによって、一つの宗教を造り、それで国民を統合させていたのです。ですから、純粋な宗教心よりも、国に対する忠誠を示すためのものでした。年に一度、皇帝の像に焼香をして、「カエサルは主です」と言えばよいのです。けれども、キリスト者は、「イエスが主です」と告白し、カエサルは主であるということを拒みました。それで、非国民ということで激しい迫害を受けることになります。

「スミルナ」という町の名前は、「没薬」から来ています。スミルナは、エジプトへ数多くの没薬も輸出していたのではないかと思います。そこで没薬は、ミイラのために使われていました。遺体の埋葬のために使われていました。キリスト者たちは主イエスのことを思っていたことでしょう。イエスが葬られる時にニコデモが、30キロもの没薬を持ってきたのです(ヨハネ 19:39)。キリストの死に自分たちも連なるからこそ、没薬の香りを放つのです。

主は、栄光の御姿の中で、「初めてあり終わりである方、死んでよみがえられた方」と宣言されています。死もいのちも、初めから終わりまですべて支配しておられる方です。主は教会が、死さえも打ち勝つことができるように建てられました。(マタ 16:18)

2B 苦しみを知る方 9

^{9a} わたしは、あなたの苦難と貧しさを知っている。だが、あなたは富んでいるのだ。

主は、「知っている」と言われて評価されます。エペソにある教会に対しては、忍耐と労苦を知っているとされていましたね。私たちは誰に見られていなくとも、よみがえりの主が見てくださっているのです。スミルナにある教会に対しては、「苦難と貧しさ」を知っておられます。

この貧しさは、ギリシア語では極貧を意味します。非常に美しい町、スミルナでなぜ彼らが極貧だったのか？信仰のゆえに、迫害されて貧しくなっているということでもあります。キリスト者であるということで、社会的に排除され、働くこともままらなくなっていました。皇帝の像を拝まないで、市場での売り買いが許されなかったのです。また、財産が没収されていたことでしょう(ヘブル 10:34 参照)。

しかし、驚くべき言葉があります。「だが、あなたは富んでいるのだ」であります。何をもって富んでいるのかというと、信仰においてです。ヤコブは手紙の中で言いました。「2:5 私の愛する兄弟たち、よく聞きなさい。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束された御国を受け継ぐ者とされたではありませんか。」イエス様は、「ルカ 6:20 貧しい人たちは

幸いです。神の国はあなたがたのものだからです。」と言われました。物が事欠いているから、それだけ信仰に富むようになります。

^{9b} ユダヤ人だと自称しているが実はそうでない者たち、サタンの会衆である者たちから、ののしられていることも、わたしは知っている。

迫害は、皇帝礼拝を拒むことによって起こっていましたが、追い打ちをかけるように、不信者のユダヤ人たちからも迫害されていました。ここで、「ユダヤ人だと自称しているが実はそうでない者たち」と言われていますが、ユダヤ人という呼び名は、主をほめたたえ、主を信じて、主との契約を持っているからこそ、ユダヤ人がユダヤ人たらしめるものがあります。今、彼らはそうになっていないので、実質はそうではないと言っているのです。(ロマ 2:28-29 参照)キリスト者がキリストらしからぬことをすれば、キリスト者と自称していると言うこともできるのです。

そして、「サタンの会衆である者たち」と言われています。これは、迫害をしているユダヤ人たちは、神に仕えているからそうしているのではなく、悪魔に触発されているからなのだ、ということです。イエスに殺意を抱いていたユダヤ人たちがいて、主はこう言われました。「ヨハネ 8:44a あなたがたは、悪魔である父から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと思っています。悪魔は初めから人殺しで、真理に立っていません。」ヨハネは第一の手紙では、義を行なわない者は、悪魔の子どもであると明言しています。悪魔が不義を行うように触発しているからです。

どうしてユダヤ人がそんなに、キリスト者を迫害するようになったのか？ローマは、多神教を信じています。ギリシアとローマの神々を拝んでいます。ユダヤ人は、一神教のために圧迫を受け、時に迫害されました。しかし社会的地位を得て、ユダヤ人だけは皇帝礼拝は除外されていました。その中で、イエスを信じる者たちが現れました。彼らは、ユダヤ教の一派だとみなされていたので、ローマ当局も初めは、とやかく言わなかったのです。ところが、異邦人もそのまま神の家族として教会は受け入れます。異邦人は多神教を信じなければいけないと、ローマはみなしていますから、彼らの存在が自分たちを危うくするのです。

自分たちがローマから弾圧されるという恐れがあって、大祭司カヤパが政治的判断で、イエスを殺すことに決めたことを思い出してください。「ヨハネ 11:48 あの者をそのまま放っておけば、すべての人があの者を信じるようになる。そうすると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も取り上げてしまうだろう。」自分たちの既成の体制が、イエスというものによって壊されて、ローマが自分たちの土地も国民も奪い取ることになる、ということを知りました。

このように、迫害というのは純粹に外部から以上に、内部から来るとことを知る必要があります。世の迫害を免れるために、世と一つになるという生き残りを内部の者がするのです。日本でも、キリシタンの迫害の急先鋒は、転んだ人々、すなわち信仰を棄てた人々です。彼らが生き残る

ために、キリシタンを当局に引き渡したのです。

そして、ここに「**ののしられている**」いとあります。ローマのキリスト者は、何かにつけ事実無根の中傷を受けていました。彼らは、聖餐式で裂かれたパンはキリストの体を表し、ぶどう酒の杯はキリストの流された血を表していましたが、人々は「彼らは宗教儀式の中で人食いをしている。」と中傷しました。そして兄弟と互いに教会で呼び合っていました。それで、「彼らは近親相姦をしている」と中傷しました。イエスご自身も、言われました。「マタ 5:11 **わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。**」

3B 死に至るまでの忠誠 10

¹⁰ **あなたが受けようとしている苦しみを、何も恐れることはない。見よ。悪魔は試すために、あなたがたのうちのだれかを牢に投げ込もうとしている。あなたがたは十日の間、苦難にあう。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える。**

彼らの中で投獄される者たちが出てきます。おそらくは、その美しい街並みの中に、地下牢があって、そこに排斥物が溜められているようなところに押し込められたのかもしれませんが。そして餓死、あるいは処刑されて、殺されることになります。

しかし主は言われました。「**あなたが受けようとしている苦しみを、何も恐れることはない。**」なぜなら、死が最後ではなく、死んだ後がもっと気にしなければならないからです。イエス様が弟子たちに教えられました。「ルカ 12:4-6 **わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。**」

そしてこのことをする者たちの背後には、悪魔がいます。「**悪魔は試すために**」とありますね。迫害や反対の背後には悪魔がいます。(1ペテロ 5:8)そして、「**あなたがたは十日の間、苦難にあう。**」と主は言われますが、ダニエルが王の食べるごちそうの肉を避け、十日間私たちを試してくださいと願いましたね(1章)。それと同じ使われ方をしています。試されている期間です。

それから、「**死に至るまで忠実でありなさい。**」と言われます。証人という言葉には、殉教するという意味合いが含まれることを以前学びました。イエスを主として生きるということには、自分が死んでいくという使命を帯びています。

ここに、キリスト者の生きる姿勢の根本があります。それは、「福音のために自分を失えば、自分を救う。自分を救おうとすると、いのちを失う」ということです。イエスが、弟子たちに言われましたね。「マル 8:35 **自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを**

失う者は、それを救うのです。」これから、ペルガモンと、ティアティラの教会の中で妥協する人たち、背教する人たちの姿を見ていきます。また、今、見ました、迫害するユダヤ人の姿も見ました。みな根底に、「自分たちが生きるため」なのです。自分たちが、いのちを失うかもしれないという恐れ、生存本能があります。それで、キリストの証しを立てる人々を排除し、あるいは、キリストの教えそのものを捻じ曲げるのです。

しかし、ここでしっかりと根付かせなければいけないのは、私たちキリスト者の生存本能は、復活にあるということです。肉体の死の後、どうなるのか？そこで生きるのか、それとも滅ぶのか？というところにある、新たな生存本能です。だから、主は、ご自身は初めから最後まで支配しておられる方であり、死んでも生きていらっしゃることを前面に持ってきておられるのです。それで、肉体の死に対しても、ご自身に対して忠実でありなさいと、優しく命じておられるのです。

ですから、イエスのお約束がこれです。「わたしはあなたにいのちの冠を与える。」「いのち」の冠です。死んでもよみがえり、そしてよみがえった時に、地上で行ったことの報いが与えられるということです。「ヤコブ 1:12 試練に耐える人は幸いです。耐え抜いた人は、神を愛する者たちに約束された、いのちの冠を受けるからです。」冠についてですが、当時、ローマでは競技で優勝した人は、総督などローマの役人から、月桂樹でできた冠をかぶせてもらいました。キリストにあつて最後まで走りぬいた人には、キリストご自身が、月桂樹のような朽ちる冠ではなく、朽ちない冠をもって報いてくださるのです。

4B 第二の死からの守り 11

11 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。勝利を得る者は、決して第二の死によって害を受けることはない。』

主が、スミルナのみならず、すべての教会に語られている呼びかけです。勝利者への約束は20章に書かれていることであり、第一の死は肉体の死ですが、永遠に神から引き離されている苦しみは第二の死であります。「20:13-14 海はその中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。彼らはそれぞれ自分の行いに応じてさばかれた。14 それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。」恐れなければいけないのは、肉体の死ではなく、この第二の死です。ゲヘナに投げ込まれることが恐ろしいのです。

2A 妥協する教会 12-17

1B 鋭い両刃の剣 12

12 また、ペルガモンにある教会の御使いに書き送れ。『鋭い両刃の剣を持つ方が、こう言われる——。

ペルガモンにある教会です。スミルナから約 80 ㎞北にあり、地中海、エーゲ海から内陸に約 25

キに入ったところにあります。ペルガモンは、スミルナまたエペソと同じような歴史を持っている町です。ギリシア帝国の中で、アッタロス朝と呼ばれるペルガモン王国の都として栄えました。そしてローマ時代に、その王がここをローマに譲渡することになり、アジア属州の中心的な都市となり、繁栄を続けました。紀元前 29 年に、皇帝アウグストゥスに献げた宮を建てるのが許され、それで小アジアの中で、最初にカエサルを崇拝する神殿が建てられました。

ここには、驚くばかりの遺跡が今も残っています。基本的にギリシア由来の町は、「アクロポリス」と呼ばれる自然の丘を防壁で固めたところに、神殿やその他の建物が建てられます。そこに、また後世に建てられた大きな神殿、「トラヤヌス神殿」があります。皇帝を祭ったところです。そして大きな図書館がありました。エペソにもありましたが、こちらには二十万冊があったと言われ、アレクサンドリアに次ぐ、ローマ第二の図書館です。アレクサンドリアにはパピルスによる本が占めていていましたが、こちらペルガモンでは羊皮紙によるものが生産されるようになったということです。英語で parchment と言いますが、それはペルガモンから来た言葉です。そして、円形劇場があり、一万人を収容したそうです。劇場からペルガモンの町の全貌を見ることができるという、絶景です。



Pergamum acropolis from Asclepium

そして、ギリシアの神々の神殿が建てられています。最も際立っているのは、ゼウスの大祭壇とです。今は、その土台の部分しかありません。なぜなら、二十世紀の初めにドイツがその多くを自国に持ち去り、「ペルガモン博物館」をベルリンに建てました。1930 年の事です。その形はまさにナチス・ドイツのヒトラーが演説をしたところにそっくりであり、いや、ナチスがその大祭壇を真似たのです。ゼウスは、ギリシアの神々の中で主神であり、全知全能と言われ、権力や力を表しています。



そして、アテナ神殿があります。この女神は、知恵や理知の神であります。何かにつけ、自分が知恵を得たい、知識を得たいとするならば、この女神にすがりに行きました。それから、ぶどう酒の神、ディオニュソスの神殿があります。強い麻薬を混ぜたぶどう酒によって、参加者たちは恍惚状態に陥ります。乱痴気騒ぎであります。

それから、ペルガモンで有名な神殿は、「アスクレピオス」であります。これは医療の神です。この神について有名なのは、蛇の付いた杖です。これは欧米の医療機関ではロゴのような印にまでなっているほど、有名であります。ここが、云わば「医療センター」の役割を果たしており、また、いろいろなオカルト的な儀式もありました。夜になって、患者を寝かせてその上に蛇を這わせるであるとか、地下通路を通らせて、通っている患者に叫ぶであるとか、不気味な儀式が含まれていました。ギリシア神話で、アスクレピオスには娘がいて、一人は、清潔と食事への強い執着があり、もう一人には、美と外見への執着があります。今日ある、あらゆる現代的な病はここからむしろ発生していると言ってもよいでしょう。異常なまでの潔癖や食事への拘り、また美や外見を異常なまでに駆り立たせる世の中です。

このように、非常に繁栄しており、知的に優れており、しかしながら国の形や文化の隅々にまで、異教の影響がとてつもなく強いという町です。しかし、エペソやスミルナと同じように、こういうところだからこそ、教会が建てられます。ギリシアによってその世界が言語と文化で統一され、そしてローマによって政治的にも統一しました。そして小アジアは、東方の国々とローマをつなぐ中間地点であり、そこにキリスト教会が建てられたということは、ローマ帝国全体への福音宣教が容易くなったということです。ですから、福音宣教においては戦略的です。しかし、キリスト者として生きることは、とてつもない圧迫です。

その中でイエス様は、「鋭い両刃の剣を持つ方」として現れます。イエス様が使徒ヨハネに現れた一部であります。イエス様の言葉があり、その言葉は人々を突き刺す力を持っているのだ、ということです。「ヘブル4:12-13 神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。13 神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。この神に対して、私たちは申し開きをするのです。」主のことばが、人々を裁きます。

2B アンティパスの殉教 13

¹³ わたしは、あなたが住んでいるところを知っている。そこにはサタンの王座がある。しかしあなたは、わたしの名を堅く保って、わたしの確かな証人アンティパスが、サタンが住むあなたがたのところで殺されたときでさえ、わたしに対する信仰を捨てなかった。

七つのどの教会にも、イエスが語られている「知っている」という言葉です。「サタンの王座がある」というのは、とんでもない異教の町であったからです。でも、「あなたが住んでいるところを知っている」とも言われます。これはとても慰められる言葉です。私たちが、文化的に、社会的に、また家庭環境や職場の環境において、とてつもない圧迫を受けている時に、イエス様は、「あなたが住んでいるところを知っている」と言われます。

「サタンの王座」であります。これがどこを指すのか、いろいろな意見がありますが、主な解釈

は、ゼウスの大祭壇です。その祭壇には、銅でできた雄牛の像がありました。その中は空洞になっており、人がその中に入ることができます。そして、そこに人を入れて、その牛の下を火で熱するのです。人心供養です。殉教者アンティパスについて、言い伝えでは、銅の牛の中に入れられたというものです。その中に入って、火によって中が徐々に熱くなり、ローストビーフのように蒸し焼きにされます。そして、その時のうめき声や叫び声を、雄牛の口には少しだけ穴が開いていて、そこからうめき声が出てくるようにさせているのです。

そして、「わたしの名を堅く保って」であります。イエスの名を保つことが、私たちの信仰の骨格であります。イエス様は言われました。「マタイ 10:32-33 ですから、だれでも人々の前でわたしを認めるなら、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。33 しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも、天におられるわたしの父の前で、その人を知らないと言います。」天の父との関係が、人の前で私たちがイエスを認めるかどうかと深く結びついています。

「わたしの確かな証人アンティパス」であります。アンティパスは、「全てに反対する」という意味合いがあります。サタンの座があるところであっても、その全体に反対することであっても、それでもイエスを証して、死んでいきました。世においては、全体の流れに逆らわないのが知恵と言われますが、アンティパスは神の知恵を持っていました。全体の流れに逆らったとしても、自分はイエスの名を否まなかったのです。

3B バラムの教え 14-15

¹⁴ けれども、あなたには少しばかり責めるべきことがある。あなたのところに、バラムの教えを頑なに守る者たちがいる。バラムはバラクに教えて、偶像に献げたいけにえをイスラエルの子らが食べ、淫らなことを行うように、彼らの前につまづきを置かせた。

ここで大事なのは、「少しばかり」ということです。教会全体としてはイエスの名を堅く保っているのですが、それでも、偽りの教えを手放さなかった者たちがいました。こうした妥協はいけないと教会の指導者は語っていたのでしょ、そして多くがそれに従っていました。けれども、頑なにバラムの教えというものを手放さなかったのです。

「バラムの教え」ですが、その特徴は、「外にいる敵が神の民を呪うことはできなかったが、民自身が神の呪いを招くようにつまづいた。」というものです。そのつまづきの石を置いたのが、バラムです。モアブの王バラクが、イスラエルを呪うようにバラムを雇いましたが、神が彼の呪いを祝福に変えられました。それで、バラムは助言して、イスラエルの宿営にモアブ人の女たちを送り込み、モアブの神々を持ち込むようにさせたのです。それで、イスラエルの男たちがモアブの娘たちと淫行を働き、また偶像を拝ませたのです。

ある人が言いましたが、「サタンは、外から攻撃ができなければ、内に入って仲良くする」という

ことです。私たち教会にとって、大きな挑戦であります。外からの圧迫は耐えられたとしても、それを支える内なる力が、妥協によって壊されてしまうことなのです。

¹⁵ 同じように、あなたのところにもニコライ派の教えを頑なに守っている者たちがいる。

エペソの人たちが憎んだニコライ派の教えですが、ペルガモンにはそれを手放さない人たちがいたということです。午前礼拝で話しましたように、この言葉の意味は「人々を支配する」です。おそらく、霊的な知識と呼ばれるものを持ち込んで、それで霊肉二元論に陥っていたと思われます。分かり易くいうと、「心が神に向いていれば、偶像の前でひれ伏しても問題はない。それは意味のないことだから。また、偶像にともなう淫行も、それが一つの儀式なのだから、問題ないだろう。」などとするのです。世と迎合してもいいのだよということを、不必要に多くの知識を与えることによって、もっともらしく見せていたのだと思います。そして、知識のある者たちが霊的で、純粹に信仰をもって戦っている人たちを見下していたと思われます。

4B 戦われる主 16

¹⁶ だから、悔い改めなさい。そうしないなら、わたしはすぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦う。

悔い改めなさい、という命令です。エペソに対しても主は、悔い改めなさいと言われました。私たちが今、圧迫や反対を感じているので、それで真っ直ぐにイエスの御名を語れていないこと。また、信仰について誤魔化してしまっていること、そうしたことがあるならば、悔い改める必要があります。

そして、もし悔い改めないならば、「わたしはすぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦う。」ということであり、気をつけてみてほしいですが、ペルガモンの教会全体に対してイエスが戦われるのではありません。そうではなく、バラムの教え、ニコライ派の教えを奉じる者たちに主が、御言葉によって戦われるということです。もし彼らが対処しなければ、主イエス様ご自身が対処されます。

具体的には、二つの意味があるでしょう。19 章では、主が口から出る剣によって、世界の軍隊が倒れます。バラムの教え、ニコライ派の者たちは偽キリスト者なので大患難においても取り残され、再臨のキリストによって滅ぼるということです。

もう一つは、まだ教会が携挙される前にすでに、教会で彼らを取り除かれるということです。パウロが、コリントの教会で偽使徒たちがいるので、脅迫する文を書きました。「Ⅱコリ 13:2-4 以前に罪を犯した人たちとほかの人たち全員に、私は二度目の滞在のとき、前もって言うておきましたが、こうして離れている今も、あらかじめ言うておきます。今度そちらに行ったときには、容赦しません。こう言うのは、キリストが私によって語っておられるという証拠を、あなたがたが求めている

からです。キリストはあなたがたに対して弱い方ではなく、あなたがたの間であって力ある方です。キリストは弱さのゆえに十字架につけられましたが、神の力によって生きておられます。私たちもキリストにあって弱い者ですが、あなたがたに対しては、神の力によってキリストとともに生きるのです。」よみがえりの主が、神の力によって、使徒パウロを通して倒れるということでしょう。

5B 隠れたマナと白い石 17

17 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。勝利を得る者には、わたしは隠されているマナを与える。また、白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が記されている。』

再び、「御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。」と言われます。これまで主が語られたことは、ペルガモンだけでなく、全教会に対して、私たちの教会に対しても語られている言葉です。

勝利を得る者に対しての約束は、第一に、「隠されているマナ」が与えられます。マナはもちろん、主が日々、イスラエルが荒野の旅をしていた時に天から与えてくださったものですが、イエスご自身が、ヨハネの福音書で、マナのことを語られた時に、「わたしはいのちのパンです。」と言われました。キリストの内に隠された、永遠のいのちのことです。パウロがこう言いました。「コロサイ 3:3 あなたがたはすでに死んでいて、あなたがたのいのちは、キリストとともに神のうちに隠されているのです。」とあります。

もう一つは、「白い石」です。ゼカリヤの預言に、この石がキリストを指していると思われる箇所があります。「3:9 見よ、わたしがヨシュアの前に置いた石を。一つの石の上には、七つの目がある。見よ、わたしはそれに文字を彫る。——万軍の【主】のことば——一日のうちに、わたしはその地の咎を取り除く。」白いのは、清さを示しています。

そのキリストのうちに、「受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が記されている」のです。新しい名とは、主なる神が、その者をご自分の者とすることを示すために、名をくださるものです。それが新しいのは、主が新たに御霊で生まれさせて、その関係においてご自分のものとするからです。そして、それが他のだれも知らないのは、その関係はその人に特別なものだからです。その人にはわかりますが、他にはわからない、妻と夫の関係のようなものです。「I コリ 2:15 御霊を受けている人はすべてのことを判断しますが、その人自身はだれによっても判断されません。」

アンティパスのように、その名が人の間では消されてしまうかもしれません。しかし、主は知っておられます。だから、隠れたところのマナがあり、だれも知らない新しい名が与えられます。人は知らず、見捨てても、主は見捨てず、守ってくださるのです。